

「話すこと」における言語運用能力の流暢さと正確さを向上させる指導 —Time Decreasing Writing とケーススタディを通して—

長期研究員 クームズ 茂子

《研究の要旨》

「話すこと」における言語運用能力の流暢さと正確さをバランスよく向上させるために、本研究では「Time Decreasing Writing」(以下、「TDW」)と「ケーススタディ」(以下、「CS」)を取り入れた。TDWは時間制限を設定した書く活動で、CSは英語話者による発話モデルを利用した振り返りの活動である。これら話す活動の前後に取り入れることで、英語を話すことを困難にしている様々な要因を解消し、言語運用能力の向上を図った。

I 研究の趣旨

社会の急速なグローバル化の進展に伴い、それに対応できる英語力の育成が求められている。大学入学者選抜においても、2020年度より4技能(読む・聞く・話す・書く)を評価する「大学入学共通テスト」に移行されることになり、言語運用能力を育成することが喫緊の課題である。言語運用能力を育成するためには、習得した言語知識を授業で活用することが不可欠であるが、多くの授業でそのような言語活動があまり提供されていない。また、多くの教師がそのような言語活動の必要性を感じつつも、4技能の中の「話すこと」の指導方法に不安をもっていることが明らかになっている。

コミュニケーションを効果的に行うためには、発話量や話す速度を表す「流暢さ」と語彙や音、文法などの産出が正しく行われているかを表す「正確さ」の両方が必要であり、この二つをバランスよく育成することが求められている。そこで、本研究では「話すこと」における言語運用能力の流暢さと正確さを育成する実践的な指導法を確立したいと考えた。

「話すこと」を困難にしている要因の一つに、英語学習や話すことへの不安、自信のなさといった「学習者要因」がある。ほかにも、人間には一度に処理できる情報量に限界があるという「容量の限界」^{*1}と定義される考えがある。外国語を話そうとするときに、容量の限界を超えてしまうと、意味を伝えることが優先され、文法的または、音声的な正確さまで注意を払えなくなる。また、その逆に正確さに注意を払うあまり、伝える内容が疎かになってしまうなどの現象が生じる。こうした「話すこと」を困難にしている要因に対する解決策を講じることで、言語運用能力を育成できると考えた。本研究では、「話すこと」の言語運用能力をバランスよく育成する手だてとして、話す活動の前後に制限時間を設けた書く活動であるTDWと英語話者の発話モデルを用いたCSを活用す

ることで、学習者の「話すこと」への心理的な負担を軽減し、言語運用能力の正確さと流暢さを同時に向上させることができると考え、本研究主題を設定した。

※1 Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistic*, 11, 2, 17-46

II 研究の概要

1 研究仮説

継続的にTDWやCSを取り入れることで、「話すこと」における言語運用能力の流暢さや正確さを向上させることができるであろう。

2 研究の内容

(1) TDWについて

TDWとは、あるテーマについて話す前に制限時間を設定して書く活動を行い、徐々にその制限時間を減らしていく活動である。図1は話す活動で扱ったテーマとTDWの制限時間を示したものである。

課	Topic	制限時間
Lesson 4	Which do you like better, school lunches or bento lunches? Why?	5分
Lesson 5	Please talk about good points of club activities you have done.	4分
Lesson 7	Choose a place where you want to take your friends. Why do you want to take them there?	3分
Activity for Communication	Please tell a story that begin with the next sentence. Last Sunday, when I was reading a book at home, suddenly there was a knock on the door.	2分
Lesson 9	What is your hobby?	2分
Lesson10	What are the good points and bad points of cell phones?	1分
Lesson11	If you had one million yen, what would you do?	30秒
Lesson12	Should all high school students do volunteer work? Why?	30秒

図1 TDWのテーマと制限時間

発話する前に、書く活動を行うことで、話す内容を整理したり、使用する語彙などを確認できたりするため、発話時の生徒の不安を軽減することが可能になると考えた。さらに、発話前に文法や表現などをあらかじめ考えられるので、言語運用能力の流暢さと正確さの向上にもつながると考えた。回数を重ねるごとに制限時間を短く

することで、アウトプットの処理スピードを伸ばすことができ、継続的に行うことで、「話すこと」における言語運用能力の流暢さの育成につながると考えた。また、様々な話題についてTDWを活用することで、初見の話題について対応できることを目指した。

(2) CSについて

CSとは、英語話者による発話モデルを利用した活動である(図2)。

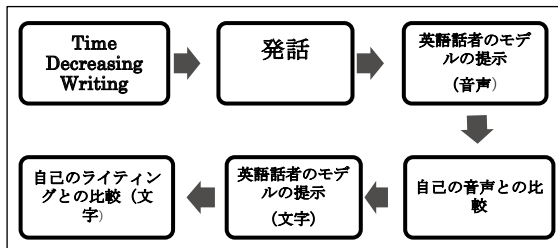


図2 CSの流れ

あるテーマについての自分の考えをTDWで整理し、発話した後、英語話者による発話モデルを音声で提示する。生徒自身が自己のアウトプットと英語話者の発話モデルを比較し、分析することで、発音やイントネーション、また使用されている語彙など、英文の音声の誤りへの気づきを促す。その後、英語話者の発話した内容を文字で提示することによって、同様に語彙や表現などの文法的誤りへの気づきを促す。CSを発話の後に活用することにより、自己のアウトプットと比較しようとする主体的な学びを促進でき、語彙や文法だけでなく音声的な視点からも振り返ることで、言語運用能力の正確さの向上を図る。

3 授業の実際

(1) 単元の指導概要

授業実践は、英語表現Ⅱの授業の8単元を22時間で実施した。各単元を3時間を基本として行い、最後の1時間を単元のまとめとしてTDWとCSを取り入れた話す活動を行った。基本的に、授業は英語で行い、生徒の英語の使用場面をできるだけ増やすように工夫し、導入では、各単元の内容に応じて、即興で情報や考えなどを伝え合う言語活動を取り入れた。TDWを行う前には、イメージマップやリストアップなどの思考ツールを活用し、ペアやグループで行うブレインストーミングを通して背景知識を広げるように工夫した。

(2) 授業実践例

ボランティア活動がテーマのLesson12では、導入時に、単元に関連する絵について、ペアの相手に何が描かれているかを即興で説明する活動を行った。活動後は、例文をスクリーンに提示し、今後使いたい表現や語句などをワークシートに記入させた(図3)。次に、ボランテ

ィア活動の長所と短所をリストアップさせ、クラス全体でそれぞれの意見を共有した。TDWでは、生徒が、話す内容を制限時間内で整理し、その後、ペアでそれぞれ1分間、自分の意見を述べた。CSにおいて、英語話者の音声モデルを聞く際、ワークシートを活用して、聞き取る内容を焦点化させながら、繰り返して音声を聞かせた。英語話者の発話を文字で提示する際は、発話の改善に役

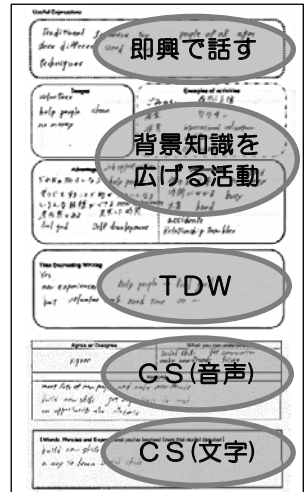


図3 ワークシートの構成

立つような語彙や表現をワークシートに記入するよう促した。その後、ペアの相手を換えて、同じテーマについて意見を述べる機会を与え、自己評価させた。

4 言語運用能力の検証

(1) 検証方法

生徒の発話の変容を検証するため、授業実践の前後で、それぞれ異なるテーマについて、生徒68名(男子37名、女子31名)の発話をタブレットに録画し、その発話を書き起こしたデータを用いて分析した(図4)。

	Topic
実践前	Which do you like better, school lunches or bento lunches? Why?
実践後	Is winter vacation better than summer vacation? Why?

図4 授業実践前後の各テーマ

検証は「流暢さ」と「正確さ」の観点から分析し、具体的な検証項目はEllis & Barkhuizen (2005)を参考に設定した(図5)。また、参考資料として、実践の前後において、英語学習や話すことに関するアンケート調査を生徒に実施した。

検証項目	検証方法
Accuracy (正確さ)	発話中の誤りのない節の割合
	発話中の誤りのないC-unit ^{※2} の割合
Fluency (流暢さ)	1分間に話した語の割合
	発話中の言い淀みとポーズの数
	同じ語や句または節の繰り返しの数
	発話中のポーズの合計

図5 検証項目と検証方法

※2 Communication unitの略で話し言葉の分析単位

(2) 検証結果

授業実践の前後の発話を分析、比較した(図6)。

検証項目	検証方法	実践前	実践後
Accuracy (正確さ)	発話中の誤りのない節の割合	46.9%	45.5%
	発話中の誤りのないC-unitの割合	58.0%	56.3%
Fluency (流暢さ)	1分間に話した語の割合	38.2%	57.3%
	発話中の言い淀みとポーズの数	14.4回	16.9回
	同じ語や句または節の繰り返しの数	2.9回	3.4回
	発話中のポーズの合計	31.2秒	22.0秒

図6 検証結果

正確さについては、実践の前後でほぼ変化は見られなかった。流暢さにおいて、発話語数は平均 22.9 語から 34.4 語、1 分間に話した語の割合は 38.2%から 57.3%へと増加し、発話中のポーズにおいては、31.2 秒から 22.0 秒まで短くなった。これらの変容は、「話すこと」における言語運用能力の流暢さの向上ととらえることができる。また、授業実践の前後で異語数^{※3}の変容を分析した結果、実践前の平均 13.1 語から実践後は平均 20.5 語まで増加した(図 7)。

	異語数
実践前	13.1
実践後	20.5

図 7 異語数

※3 異なる語の数

5 考察

流暢さにおける生徒の向上的変容や、異語数の増加から、発話に使用できる言語知識が増え、伝えたい内容をより多くの言葉で話せるようになったといえる。「発話中の言い淀みとポーズの合計」と「同じ語や句または節の繰り返し回数」は微増し、流暢さがやや低下したように見えるものの、発話語数が増加したことを踏まえると当然の結果であり、TDWが「話すこと」における言語運用能力の流暢さの育成に有効であることが認められる。つまり、英語を使用する機会を継続的に設けることで発話に慣れ、TDWの活用によって、英語の処理スピードが伸び、「話すこと」における言語運用能力の向上に繋がったと考えられる。授業実践の後に実施したアンケートでは、96%の生徒が「英語を話す力が伸びたと思う」と回答しており、その理由として「回を重ねるごとに話せるようになった」「以前よりも意見や伝えたいことがすぐに思い浮かぶようになった」との記述回答が多かったことから、TDWが流暢さの育成に有効であったといえる。さらに、授業で用いた生徒のワークシートでは、1 回目の TDW で、多くの生徒が話したいことを文単位で書き留めているのに対し、最終である 8 回目の TDW ではキーワードなどのポイントのみを記述している生徒が多く、段階的に TDW の制限時間が短くなることで準備に時間をかけなくても即興で話す力が伸びたことが認められる。

一方で、正確さについては授業実践前後で変容が見られなかった。これは、正確さの育成が流暢さの育成よりも時間がかかることが原因と考えられる。TDW の活用で異なる様々な話題について即興で発話するようになったものの、適切な語彙を用いたり正確な文法や表現を駆使したりするようになるには 8 回の CS 活動だけでは、不十分であったことが分かる。事後のアンケートにおいても多くの生徒が「間違いを気にせず、相手に意見を伝

えることを重視した」と回答しており、正確な語彙や文法の使用よりも、意思伝達を優先していたことが分かる。これは言語習得としては適切なプロセスであり、「容量の限界」により、多くの生徒の注意がまだ正確さには向いてないと考えられる。しかし、モデルの英語話者の発話内容を可視化することで、語彙や表現を学べたと回答した生徒も見られた。この生徒は本来の CS の目的通り、処理スピードが伸びたことにより、容量に余裕ができたため、正確さに注意を向けることができたといえる。また、発話語数も異語数も増加したにも関わらず、正確さの「発話中の誤りのない節の割合」「発話中の誤りのない C-unit の割合」の両項目において、実践前に比べて割合が減少せず、ほぼ変わらない値であった。これは、正確さが育成されている過程ととらえることもでき、今後継続して CS を活用していくことで、正確さの向上を望むことができると考える。

III 研究のまとめ

1 研究の成果

授業を通して流暢さが向上し、「話すこと」における言語運用能力の育成に役立つ結果が得られた。第二言語の習得には、長期的な視野で継続的に取り組む必要がある。正確さは流暢さに比べて育成に時間がかかることを踏まえて、「話すこと」の言語運用能力を向上させるためには、3 年間を見通して「話すこと」の指導を計画することが必要である。その計画に基づき、TDW や CS のような言語活動を継続的に行うことによって、正確さと流暢さをバランスよく育成することができると考える。

2 今後の課題

実践前は伝える内容も英語も咄嗟^{とっさ}に思い浮かばず、ほとんど何も言えなかった生徒が、実践後は発話するようになった一方で、書くことを活用することが、弊害になる場合も見られた。TDW を応用した活動である紙上での意見交換を行った際、感想として「文法や綴りに自信がもてなかった」と記述した生徒もおり、語彙や文法の正確さを意識し過ぎるあまり、発話するよりも書くことの方に負荷を感じる生徒がいることが分かった。「話すこと」における言語運用能力の育成のために、TDW や CS の活用は有効であるが、生徒の能力に応じて、言語活動の取り入れ方を工夫する必要がある。今後も、効果的な使い方や支援のあり方を工夫しながら、TDW や CS を取り入れた指導を継続し、グローバル社会に対応できる言語運用能力の育成を目指したい。